

## ■チャイコフスキー／交響曲第6番 口短調 Op.74「悲愴」

20世紀後半のロシアを代表する作曲家の一人、アルフレッド・シュニトケは、無神論が起こって初めて暗いフィナーレが生まれたと主張する。何も信じられなくなった近現代ではポジティブなフィナーレが書けなくなったと言うのだ。そして暗いフィナーレの最初の一例がピョートル・チャイコフスキー（1840-93）の「悲愴」交響曲の終楽章である。

作曲家が亡くなる、わずか1週間ほど前に初演された「悲愴」交響曲は、重くて暗く、感傷的になったかと思うと、まるで戦闘のように爆発する情感の振幅の大きい音楽だ。副題はフランス語のPathétiqueを翻訳したもの。「情熱」という意味で、本来、「悲しさ」のニュアンスはない。全篇に漲る陰鬱な気分から、私たちは「悲愴」という言葉の持つ悲痛な響きが音楽にぴったりだと感じてきたが、作曲家の思い描いていたストーリーは必ずしも悲劇ではなかったのかもしれない。ペテルブルクでの初演時には副題はなかったが、その後、弟モデストの提案でこの愛称が誕生し、最初の出版譜に印刷された。チャイコフスキーは標題音楽として「悲愴」を書いたと思われるが、描かれた内容については明言を避けている。晩年の作曲家を襲っていた不安や悲しみが何に由来するのか、私たちは想像するしかないのだが、考えてみれば、この曲が書かれたのは帝政ロシアの時代だったから、個人的な状況ばかりでなく、抑圧された社会の空気も暗くよどんでいたのかもしれない。

第1楽章アダージョ・アレグロ・ノン・トロツポは導入部ではじまる変則的なソナタ形式。アレグロの主部では、導入部のファゴットの楽想からとったモチーフによる第1主題がヴァイオリンとチェロで提示される。アンダンテの第2主題は情熱を秘めた楽想である。再現部は第2主題のみで構成されている。第2楽章アレグロ・コン・グラツィアは三部形式。ロシア民謡風の5拍子のリズムをもつ軽快な、一種の舞曲である。第3楽章アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェは2部形式で諧謔的な音楽。スケルツォであると同時に、行進曲風でもある。第4楽章アダージョ・ラメントーソもしくはアンダンテ・ラメントーソは弦楽合奏が深い悲哀をにじませた旋律を奏でる。しだいに切迫していき、ヴィヴァーチェで下降音型を反復すると、ひと段落する。やがてトロンボーンとチューバの四重奏が聴かれ、弦合奏が旋律を掛け合いながら、音楽は消え入るように終わる。ペシミスティックな情感が横溢するフィナーレである。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます

### 楽器編成

フルート3（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2、クラリネット2（バス・クラリネット持ち替え1）、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、バスドラム、シンバル、タムタム、弦五部

※スコア上の表記